

報告・資料

小学生における攻撃性得点の分類基準

—小学生用P-R攻撃性質問紙による3種類の攻撃性について—

The criterion for classifications of aggressiveness scores in elementary school children:
On the three types of aggressiveness by the P-R Aggression Questionnaire

坂井明子・山崎勝之*

はじめに

児童期の攻撃性に関する様々な研究から、児童の攻撃性の高さが、仲間関係（例えば、Dodge, Lochman, Harnish, Bates, & Pettit, 1997）や心理・社会的適応状態（例えば、Vitaro, Gendreau, Tremblay, & Oigny, 1998）にまで悪影響をおよぼすことがわかってきている。これらの、攻撃性とその他の要因との関連を調べる研究の流れの中で、近年の特徴の一つは攻撃性の細分化である。発達心理学の分野における攻撃性の大別には、Dodgeらによる「反応的攻撃（reactive aggression）」と「道具的攻撃（proactive aggression）」という分け方が使われることが多い（Crick & Dodge, 1996; Dodge & Coie, 1987）。怒り感情を伴う、挑発やフラストレーションに反応して生じる攻撃が反応的攻撃である（Berkowitz, 1993）。それに対して、自らの目的を達成するために攻撃を使う行動が道具的攻撃であり、社会的学習の結果獲得され、必ずしも怒りやフラストレーションを含む必要はないとされている（Bandura, 1983）。このように攻撃性を大きく2分することによって、仲間関係や学校適応の問題等がはっきりしてくることが指摘されている。同じ攻撃的な児童でも、道具的攻撃を多く示す児童は反応的攻撃を多く示す児童ほど仲間に嫌われないことや（Dodge et al., 1997）、学校適応に関しても、道具的攻撃を多く示す児童は外部へ向かうような発散的な問題（例えば器物

破損や校則違反）を示し、反応的攻撃を多く示す児童は自らの内へこもるような問題（例えばうつ）を示すことが明らかになっている（Vitaro et al., 1998）。

ここで取り上げた攻撃性の2つの下位概念は、Dodgeらの尺度（Dodge & Coie, 1987）で測定されることが多いが、実際は、両因子の相関が高く、互いの弁別性が保証されているとは言い難い（例えば、Dodge & Coie, 1987で $r=.76$ ；Poulin & Boivin, 2000aで $r=.82$ ；Price & Dodge, 1989で $r=.83$ ；Vitaro et al., 1998で.71）。そこで、これら2つの攻撃性を弁別することのできる、小学生用P-R攻撃性質問紙が開発された（坂井・山崎, 2002a,b）。ここでは、道具的攻撃の概念（目的を達するために攻撃を使う）に含まれ、反応的攻撃に近い暴力と関わる面を強調しないような攻撃性である関係性攻撃（relational aggression）が道具的攻撃として採用された。関係性攻撃とは、女兒に特徴的とされる攻撃の型で、自分の目的を達成するために他人の人間関係を操作する行動であり、具体的な行動例としては、悪口を言ったり、仲間に入れなかったりすることで相手を社会的に排除したり、相手が嫌われるように仕向けること等が挙げられる（Crick & Grotpeter, 1995）。他人の人間関係を操作するためには冷静に自分のとるべき行動や、他者の人間関係を評価する必要がある、概念的にも反応的な要素は少ない。また、これまでの発達分野では、反応的攻撃といえはフラストレーション事態に対して、直後に怒り感情を表出する面（反応的表出性攻撃）だけが測定されてきたが、これに対して、

*鳴門教育大学

怒り感情を素直に表出できない・しないタイプの攻撃性の存在が指摘されている。反応的不表出性攻撃である(山崎, 2002)。小学生用P-R攻撃性質問紙では、以上3つの攻撃性(反応的表出性攻撃, 反応的不表出性攻撃, 道具的關係性攻撃)を測定することができ、その妥当性, 信頼性が確認されている(坂井・山崎, 2002a,b)。

この質問紙の完成を受け、数千人規模の大量データにより、この質問紙の標準得点を設定することを本研究の第1の目的とする。それにより、ある児童の攻撃性が高いのか低いのか、また、高いとすれば、どの程度標準から逸脱して高いのかを知ることが、また、攻撃性得点の素点では不可能だった攻撃性間の高低の比較ができる。第2に小学校高学年(4~6年生)の攻撃性得点に性差および学年差が存在するかどうかを明らかにすることを目的とする。第3に各攻撃性間の相関について明らかにすることも目的とする。

方 法

1. 協力児童

大阪府, 岡山県, 岐阜県, 徳島県, 和歌山県の公立小学校22校に在籍する小学生3816名について調査をおこない、うち197名はデータに不備があったため分析から除外し、3619名(男子1853, 女子1766)を分析対象とした。内訳は4年生1196名(男子601, 女子595), 5年生1220名(男子621, 女子599), 6年生1203名(男子631, 女子572)であった。

2. 質問紙ならびに実施手続き

小学生用P-R攻撃性質問紙は表出性攻撃, 不表出性攻撃, 關係性攻撃それぞれ7項目と無関項目3項目の計24項目から成り、児童は、それぞれの質問項目に対して自分がどの程度当てはまるかを、「まったくあてはまらない」・「あまりあてはまらない」・「よくあてはまる」・「とてもよくあてはまる」の4段階で評定した。したがって、各下位尺度の得点範囲は7点から28点である。調査はクラス単位で担任もしくは養護教

諭に実施してもらった。

結果と考察

1. 得点分布の特性

表出性攻撃, 不表出性攻撃, 關係性攻撃の得点ごとの人数分布を全体(図1)および男子(図2)女子(図3)別に示した。分布の正規性からの逸脱の程度を確

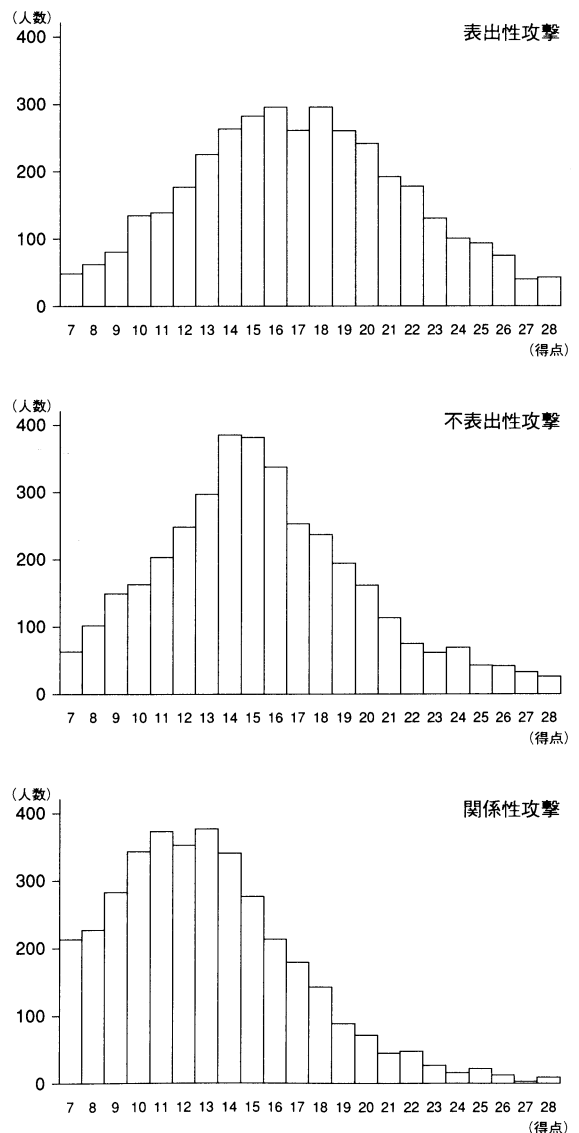


図1 全被験者の得点分布

認したところ、表出性攻撃の歪度が.11、尖度が-.53、不表出性攻撃の歪度が.47、尖度が.01、関係性攻撃の歪度が.74、尖度が.51であった。すべての攻撃性で歪度は1を切っており、正規分布から明らかに逸脱しているとは言えなかったものの、攻撃性という、社会的に望ましくないとされている特性を測定しているため、関係性攻撃と不表出性攻撃は正の歪曲を少し示したものと考えられる。表出性攻撃も攻撃性を測定して

いるのであるが、現在の小学生にとっては、関係性攻撃、不表出性攻撃に比べれば、問題が少ない攻撃性と認知されていたり、実際にそのような行動をとりやすくなっているであろう。社会的に良くないものとされる特性を測定する場合、ある程度の正の方向への歪曲は仕方がないものと考えられる。また、尖度に関してはすべての攻撃性で3を大きく下回り、かなりなだらかな分布を示した。

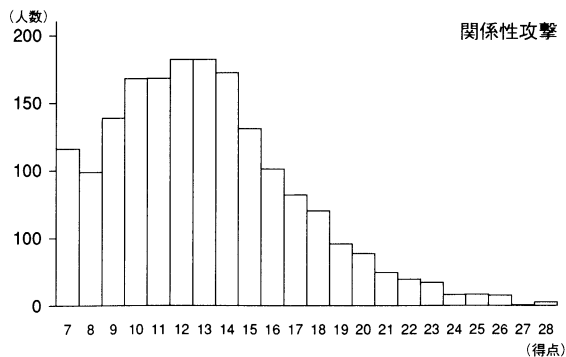
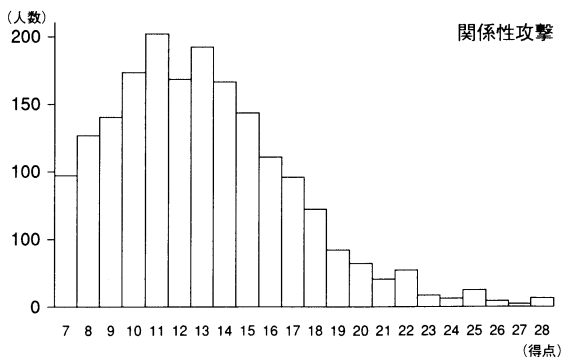
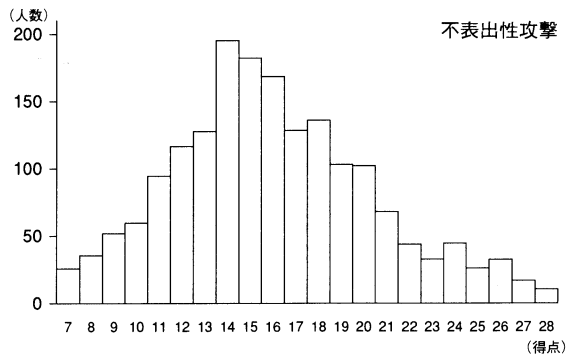
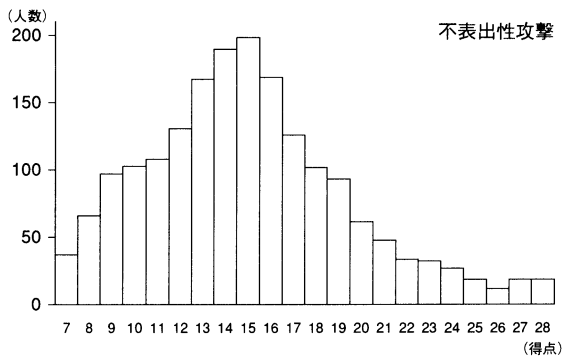
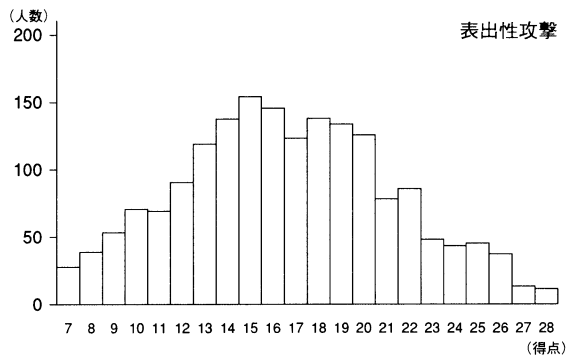
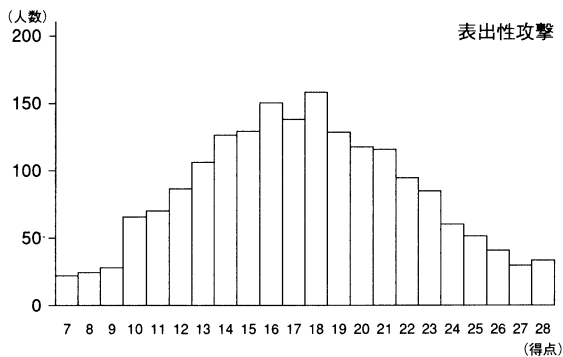


図2 男子の得点分布

図3 女子の得点分布

2. 分類基準

本研究では3600名を超える被験者を5府県22校から集めることができた。そのため、本研究での得点分布を我が国における攻撃性（表出性、不表出性、関係性）の分布の標準であると考えてかまわないだろう。そこで、男子女子の人数をそれぞれ6分割し、それぞれの攻撃性について、各攻撃性得点の上位1/6を非常に強い攻撃性を持つ児童、上位から2番目の1/6の児童をやや強い攻撃性をもつ児童、下位1/6の児童を非常に弱い攻撃性をもつ児童、下位から2番目の1/6の児童をやや弱い攻撃性をもつ児童、残りの1/3の児童を普通の児童として、基準得点を算出した。この基準に従い、実際に分類した際の各攻撃性の基準得点および人数分布を表1に示した。これらは、あくまでも任意の基準であるが、ある児童の得点が全体のどのあたりに位置するのかを大まかに示す基準として利用することができる。

3. 学年、性による得点の違い

各攻撃性について、学年ごとに性別の平均値を表2に示した。各攻撃性の平均得点を対象とした2要因（性×学年）の分散分析の結果、表出性攻撃について

は、有意な学年 ($F=33.76$, $df=2/3613$, $p<.001$) と性 ($F=31.87$, $df=1/3613$, $p<.001$) の主効果が見られ、交互作用は見られなかった ($F=2.34$, $df=2/3613$, $p>.05$)。その後の検定 (Scheffe: $\alpha=.05$) によると、4年生 (平均16.14) よりも5年生 (平均17.28) や6年生 (平均17.66) の方が、また、女子 (平均16.57) より男子 (平均17.47) の方が有意に得点が高かった。

不表出性攻撃についても有意な学年 ($F=7.79$, $df=2/3613$, $p<.001$) と性の主効果 ($F=47.69$, $df=1/3613$, $p<.001$) が見られ、交互作用は見られなかった ($F=.92$, $df=2/3613$, $p>.05$)。その後の検定 (Scheffe: $\alpha=.05$) によると、4年生 (平均15.07) よりも5年生 (平均15.74) や6年生 (平均15.58) の方が、また、男子 (平均14.97) より女子 (平均15.98) の方が有意に得点が高かった。

関係性攻撃については有意な学年の主効果 ($F=72.67$, $df=2/3613$, $p<.001$) と交互作用 ($F=5.59$, $df=2/3613$, $p<.01$) が見られたが、性の主効果は見られなかった ($F=.12$, $df=1/3613$, $p>.05$)。その後の検定 (Scheffe: $\alpha=.05$) によると、4年生 (平均11.95) よりも5年生 (平均13.26) や6年生 (平均13.79) の方が、また、5年生よりも6年生の方が得点が高かつ

表1 各攻撃性の分類基準 (人数)

		非常に弱い	やや弱い	普通	やや強い	非常に強い
表出性	男子	7-12(295)	13-15(361)	16-19(574)	20-22(326)	23-28(297)
	女子	7-11(259)	12-14(344)	15-18(555)	19-21(333)	22-28(275)
不表出性	男子	7-10(303)	11-12(239)	13-16(726)	17-19(321)	20-28(264)
	女子	7-11(263)	12-13(241)	14-17(665)	18-20(335)	21-28(262)
関係性	男子	7-9(365)	10-11(377)	12-14(529)	15-16(255)	17-28(327)
	女子	7-9(351)	10-11(334)	12-14(533)	15-16(230)	17-28(318)

表2 3つの下位尺度の平均得点*

	全体	男子	女子	4年生			5年生			6年生		
				全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子
表出性攻撃	17.03 (4.73)	17.47 (4.77)	16.57 (4.64)	16.14 (4.89)	16.80 (4.93)	15.48 (4.77)	17.28 (4.68)	17.67 (4.73)	16.88 (4.59)	17.66 (4.48)	17.90 (4.60)	17.38 (4.34)
不表出性攻撃	15.46 (4.32)	14.97 (4.43)	15.98 (4.39)	15.07 (4.62)	14.70 (4.51)	15.45 (4.71)	15.74 (4.36)	15.22 (4.28)	16.27 (4.38)	15.58 (4.29)	14.99 (4.47)	16.22 (3.99)
関係性攻撃	13.01 (3.95)	13.00 (3.94)	13.01 (3.97)	11.95 (3.83)	12.11 (3.84)	11.79 (3.81)	13.26 (3.98)	13.36 (4.11)	13.17 (3.84)	13.79 (3.82)	13.48 (3.73)	14.13 (3.90)

*カッコ内は標準偏差

た。さらに、有意な交互作用が見られたことから、各学年における性差と男女ごとの学年差を調べた。4年生 ($t=1.48$, $df=1194$, $p>.05$), 5年生 ($t=.82$, $df=1218$, $p>.05$) には性差は見られなかったが、6年生では女子 (平均14.13)の方が男子 (平均13.48)より有意に得点が高かった ($t=2.95$, $df=1201$, $p<.01$)。また、性別による学年差について一元配置分散分析を行ったところ、男子 ($F=22.93$, $df=2/1850$, $p<.001$) 女子 ($F=54.77$, $df=2/1763$, $p<.001$)ともに学年差が有意であったが、その後の検定 (Scheffe: $\alpha=.05$)によると、男子の場合、4年生 (平均12.11)よりも5年生 (平均13.36)や6年生 (平均13.48)の方が関係性攻撃が高いものの、5年6年の間には差があるとは言えず、女子の場合、4年生 (平均11.79)よりも5年生 (平均13.17)や6年生 (平均14.13)の方が、また、5年生よりも6年生の方が関係性攻撃が高かった。

4. 各攻撃性得点間の相関

各攻撃性間の相関を性、年齢ごとに求めたものを表3に示した。その値は.31から.57の範囲をとり、Dodgeらの尺度 (Dodge & Coie, 1987) で問題となった表出性攻撃 (反応的攻撃) と関係性攻撃 (道具的攻撃) の相関の高さもすべての下位集団において.57までにおさえられた。また、学年ごと、男女ごとの攻撃性間の相関の値はすべて、同程度の値を示し、各攻撃性の関係は、性、学年を通じて安定したものであった。

このように、信頼性、妥当性の確認された小学生用P-R攻撃性質問紙 (坂井・山崎, 2002a,b) の分布、分類基準、学年差と性差、および各攻撃性間の相関状況について、詳しい資料が提供され、これにより、今後、小学生用P-R攻撃性質問紙を用いた研究の際に、児童

の分類などの基準を使用することができることとなった。

引用文献

- Bandura, A. 1983 Psychological mechanisms of aggression. In R. Green & E. Donnerstein, (Eds.), *Aggression: Theoretical and empirical reviews*, Vol. 1. *Theoretical and methodological issues* (pp. 1-40). New York: Academic Press.
- Berkowitz, L. 1993 *Aggression: Its causes, consequences and control*. New York: Academic Press.
- Crick, N. R., & Dodge, K. A. 1996 Social information- processing mechanisms in reactive and proactive aggression. *Child Development*, **67**, 401-413.
- Crick, N.R., & Grotpeter, J.K. 1995 Relational aggression, gender, and social-psychological adjustment. *Child Development*, **67**, 993-1002.
- Dodge, K.A., & Coie, J.D. 1987 Social-information- processing factors in reactive and proactive aggression in children's peer groups. *Journal of Personality and Social Psychology*, **66**, 710-722.
- Dodge, K. A., Lochman, J. E., Harnish, J. D., Bates, J. E., & Pettit, G. S. 1997 Reactive and proactive aggression in school children and psychiatrically impaired chronically assaultive youth. *Journal of Abnormal Psychology*, **106**, 37-51.
- Poulin, F., & Boivin, M. 2000 Reactive and proactive aggression: Evidence of a two-factor model. *Psychological assessment*, **12**, 115-122.
- Price, J., & Dodge, K. A. 1989 Reactive and proactive aggression in childhood: Relations to peer status and social context dimensions. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **17**, 455-471.
- 坂井明子・山崎勝之 2002a 小学生用P-R攻撃性質問紙 (PRAQ-C) の作成 -道具的ならびに反応的攻撃性質問紙の因子的妥当性と内的整合性の検討- 日本心理学会第66回大会発表論文集, 895.
- 坂井明子・山崎勝之 2002b 小学生用P-R攻撃性質問紙 (PRAQ-C) の作成 -道具的ならびに反応的攻撃性質問

表3 各攻撃性間の相関係数

	全体	男子	女子	4年生			5年生			6年生		
				全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子
表出性-不表出性	.35	.35	.38	.36	.34	.41	.34	.32	.39	.34	.39	.31
表出性-関係性	.51	.50	.53	.53	.49	.57	.48	.47	.48	.50	.53	.48
不表出性-関係性	.39	.38	.41	.41	.40	.43	.38	.36	.41	.39	.38	.38